

# 『ブリタニカ国際大百科事典』

文化大革命

の交換を「限定交換」(change restrict)と「一般交換」(change general)の二つに分ける。限定交換では、男は交換として妻をもらえることが保証されれば、自分の姉妹を相手の集団に嫁にやる。一般交換では、男はある集団に自分の姉妹を嫁にやり、他の集団から妻をもらう。この場合はたとえば集団Aは集団Bから、BはCから、そしてCはAから嫁をもらうので、交換に参加する集団は円環状に配列され、これには新しい集団が無限に参加しつづけることになる。こうして一般交換では縁組関係は広く拡大される。

レビーストロースはトーテムズム(ある集団が特定の動物・自然物などとなんらかの特殊な関係——たとえばそれら自分たちの始祖と考える——にあるという信仰に基づく制度)の機能主義的解釈を批判し、特定の動物がトーテムとして選ばれるのは、それが社会のなかで大切な機能を果たしているからであるという機能主義的解釈は、実利性のまったくないものがなぜトーテムとされていくかということを説明することができないと述べている。そこで彼はトーテムとされるものは、その社会の人々にとって、一面において類似しているが、他面において対立するものであるという点に注目する。オーストラリアのある原住民は「タカ」と「カラス」と呼ばれる「半族」に分れている。タカとカラスという対が双分組織(その項参照)の半族を表わすのはどのような原則に基づいているかということ調べてみると、タカとカラスは両方とも肉食であるが、前者は掠奪者、後者は腐肉をあさる鳥とされていることがわかる。これに似たトーテム区分の原理はアメリカ大陸原住民のなかにもみられる。なかには天と地、川上と川下、赤と白などの対比が用いられている場合もある。彼はトーテム区分の原理は、対立するものの結合にあると考える。こうして特定のものがトーテムに選ばれるのは、「食べるに適している」からではなく、「考えるに適している」(bon a penser)からであるというのである。レビーストロースは、「対立や相関関係という概念、対立するものの対という概念は長い歴史をもっている。しかし、構造言語学と、それに次いで構造人類学とが、こういう概念を人間科学の語彙のなかにみごとに復権させたのだ」と述べている。

彼はアメリカ大陸原住民のさまざまな神話には、生と死、善と悪、正と邪、人間と神、男と女、正当と不当、天と地……といったいくつもの二項対立と、その二項の

媒介者が存在するとしている。また北アメリカインディアンのチムシアン族のある神話を分析し、東と西、天と地、陸と海といった対立が、さまざまな側面に現れ、しかもこういう対立は克服できないということが強調されていると論じている。神話は、婚姻の居住制(夫方居住制や妻方居住制)や相続制度について、実際に存在する慣習以外のさまざまな可能性や形態を示し、さらにそれらが結局は成功しないことを示し、現実の習慣の欠陥を認めながらも、それを是認し、正当化すると述べている。(→「構造主義」)

は実証的な人類学によって決定的に批判されたが、四五年以後になって文化の進化論が再び登場する。古典的進化主義は確かにまちがってはいたが、文化の発展という事実は明らかである。現代の新しい進化主義者によると、文化の進化は「一般進化」と「特殊進化」に分けられる。前者はすべての文化全体にみられる進化の傾向をさし、後者は特定の文化が適応を通じて行つた歴史的発展を意味する。「一般進化」は、ホワイト、チャイルド、サーピス Elman R. Service (一九五〇) によって主張されている。ホワイトは人間が利用できるエネルギー量の増大によって文化の進化を探究する。考古学者チャイルドは、食糧採集の段階から植物栽培と動物の飼育への移行を「食糧生産革命」と呼び、さらに「都市革命」への発展をたどる。サーピスは社会組織の進化論的図式を作り、バンド社会→部族社会→酋長制社会→国家という発展段階を論じている。アメリカの人類学者スチュワード Julian H. Steward (一九〇二—一九七二)はこれらの一般進化論に反対して特殊進化を主張し、ホワイトの単一的進化論に対して多系的進化を唱えた。彼は生態学の条件を重んじ、ベルー、メソアメリカ、メソポタミア、エジプト、中国という五つの乾燥ないし半乾燥地域における古代の「灌漑文明」の発展が類似の段階をたどることを明らかにした。

【理論と方法】文化人類学の方法として最も重要なものは、現地調査と比較法である。現地調査には文献に基づく理論的な研究が必要であり、調査の結果導き出された理論は比較研究によってその妥当性が吟味される。そして比較研究による理論をさらに現地調査によって検証するという場合もある。統計的方法を用いて比較文化的研究法を著しく発達させたのは、アメリカの人類学者マードック George Murdock (一八九七— ) である。彼は膨大な資料を駆使し、二五〇の社会について、親族組織を中心に統計的に種々の仮説検証を行なった。この方法を彼は「通文化的方法」(cross-cultural method)と呼び、「人間関係地域資料」(Human Relations Area Files) 略して HRAF をエール大学につくり、世界中の民族誌資料を集め分類した。その後この通文化的方法による研究はさらに進められている。現代アメリカの社会学者スワンソン Guy E. Swanson (一九二二— ) は、原始宗教(その項参照)の研究にこの方法を用いている。イギリスの社会人類学者リーチ Edward R. Leach (一九一〇— ) は、マードックらの通文化的方法は、要素を社会の脈絡から切り離して扱った進化主義や伝播主義と同じ誤謬を犯していると批判している。リーチは特定のいくつかの要素の相関関係は、A、B、C という文化にもみられるといった通文化的研究よりも、A という社会的脈絡においてそれらの要素がともに起る構造的・機能的な論理はなんであるかを探ることのほうが一層重要であると述べている。

文化人類学説の発展の過程においてさまざまな理論が現れた。種々な理論は必ずしも「あれかこれか」という種類のものではなく、現象のあるものは特定の理論によって説明されるが、別の現象はさらに違った理論によってとらえられ説明される。一九二〇年頃までに進化主義

レビーストロースらの構造主義にしても、これは機能主義と必ずしも矛盾するものではない。現象のあるものは機能主義的解釈によって説明されるが、別の現象は、構造主義的な立場から明らかにされる。リーチが述べているように、構造主義的解釈の仕方が機能主義的解釈法よりもまさっているとか、あるいは後者のほうがすぐれているということではなく、構造主義的視角は機能主義的分析ではとらえられなかった現象を新たにとらえ、それを説明するのである。(→「人類学」「物質文化」「文化」)

(吉田 恒彦)

## 文化大革命

毛沢東主導下で一九六五年秋から中国に起つた文化大革命は、中国社会を激しく揺さぶり、未曾有の混乱に陥れたばかりか、全世界に大きな衝撃を与えた。六六年夏に突如出現した紅衛兵運動や相次ぐ政治指導者の失脚、そして毛沢東の絶対的権威の確立という一連の事態は、だ

# 文化大革命

れもが予想しえなかった政治的大変動であった。

文化大革命の本質 中国ではこの「無産階級文化大革命」を「人の魂にふれる革命」だと強調し、「中国社会主義革命の新段階」を画するものと公式に規定した。文化大革命は、毛沢東が一九六二年九月の中国共産党第八期十中全会で全党、全人民に発した指示「絶対に階級と階級闘争を忘れてはならない」が出発点といわれ、最大の目標は社会主義社会における階級闘争の貫徹にあり、当面「党内の資本主義の道歩む一握りの実権派」を根こそぎ打倒することが最大の課題だとされた。文化大革命は、一貫して中国共産党内部の権力闘争としての本質と党内闘争の大衆運動化という内容をもっていた。

【政治的側面】文化大革命の第一段階では、毛沢東の絶対的権威を確立するとともに、林彪（その項参照）を党副主席とし、毛沢東の後継者とする新しい政治的リーダーシップの確立を強行した。しかしこのことは、林彪を中心とする人民解放軍の指導性に依拠しないかぎり、劉少奇・鄧小平（各項参照）をはじめとする実権派からの奪権が不可能であったことも示していたのであって、そこには兵營体制化した権力中樞における政治的危機と内部矛盾が集中的に表現されていたのである。一九七一年に起った衝撃的な林彪異変は、その証明でもあった。

【イデオロギイ的側面】当初「文芸整風」として始めたことに示されるように、従来の文化や価値意識を根本的に転換しようとした側面があった。ここには、社会主義社会がその発展過程において、人類の文化遺産をどう継承していくかという問題が含まれており、中国は、自己の文明史をも徹底的に書き換えようとしたかにみえた。しかし、「毛沢東思想」の絶対化は、思想や文化をその本来的な生命においてではなく、体制的なイデオロギイとして機能させる結果しか招かなかったのである。

【社会的側面】文化大革命は、「貧困のユートピア」を求めて中国社会を変革しようとしたものであり、毛沢東には、都市エリートを中心とした新しい階級化 Stratification を打破しなければならぬという認識があったといえよう。しかし毛沢東家長体制のもとでそれが実践されるに及んで、民衆の抵抗と中国伝統社会の厚い壁にはばまれて、毛沢東の理想は破産した。これらの側面をもった文化大革命の本質は、「階級闘争」という名のもとでの党内闘争であった。つまり中国共産党内部に生じた深刻な党内闘争を、あらゆる論理

と強権を用いて、毛沢東の勝利に帰そうとした政治過程こそ文化大革命であったといわねばならない。こうした党内闘争を大衆運動化していくところに毛沢東政治の著しい特質があるが、党内闘争で毛沢東が当初明らかに少数派であったことは、文化大革命の性格を決定づけた。文化大革命胎動期の政治状況のなかで、すでに一九五〇年代末の「大躍進」政策の挫折以来、毛沢東らは党中央で少数派であり、毛沢東自身、北京を脱出して上海から文化大革命ののろしをあげざるをえなかったのである。文化大革命の経過「上海から北京へ」毛沢東は、江青、張春橋ら「江青文芸サロン」の面々が集っていた上海から文化大革命の開幕を告げ、若き文芸批評家姚文元（上海市党委員会書記）は、一九六五年十一月十日、「新編歴史劇『海瑞罷官』を評す」と題する論文を発表して、歴史学者として知られた北京市副市长吳晗に対する全面的な批判を開始した。吳晗批判は、北京の指導的な知識人たち「三家村グループ」に対する批判へと拡大し、やがてその黒幕として北京市党委員会が実権派の牙城として激しく糾弾され、北京市長彭真（北京市党委員会第一書記）らが一斉に批判された。彭真らは、六六年二月「二月提綱」といわれる文芸・学術政策を提起して対抗した



毛沢東語録を手に天安門広場に集った紅衛兵（1967）北京 PANA

が、同年二〜三月劉少奇夫妻が西南アジア三ヶ国を訪問中に情勢は一変し、北京は林彪の指揮する軍事管制下におかれ、やがて毛沢東も北京へ帰還したのである。【文化大革命の高揚】一九六六年四月上旬、毛・林主流派は北京市党委員会改組を決定し、四月十八日の人民解放軍機関紙「解放軍報」社説は、これら一連の経過を「プロレタリア文化大革命」と初めて公式に規定した。五月十六日には党中央の「通知」（五・一六通知）を公布、党中央文革小組（組長陳伯達、第一副組長江青）を設置するとともに、「われわれの身邊にひそんでいるブルジョア式の人物」をさらにあばき出すよう呼びかけた。五月二十五日には北京大学の若き女性教師馮元梓が、校長の陸平らを「三家村グループ」の一味として激しく批判する大字報（壁新聞）を張出した。毛沢東は六月一日、これを全国放送するよう指示し、「二十世紀六〇年代のバリ・コミューンの宣言書」だとたたえたのである。

そして六月三日に彭真らの解任と北京市党委員会の改組が発表され、実権派の牙城の崩壊が告げられると同時に、「毛沢東思想」を堅持してきた林彪の功績が大きくなると、劉少奇、鄧小平らは急遽工作組を組織し、すでに組織化されていた紅衛兵組織に対する抵抗と防衛を試みたために、党内の権力闘争は一挙に激化していった。「造反有理」を呼号する紅衛兵運動が内部的に激発するなかで、政治的緊張はますます高まったが、それとともに毛沢東のリーダーシップが回復しつつあった八月、中国共産党第八期十一中全会が北京で開かれ、毛沢東は会期中の八月五日、「司令部を砲撃しよう——私の大字報」をみずから張出し、同八月には「プロレタリア文化大革命に関する決定」（二六ヶ条）が発表された。

【軍の介入と九全大会】一九六六年八月十八日に天安門広場での第一回一〇〇万人集会に集った紅衛兵は、全国主要都市に街頭進出し、「毛沢東思想」をたたえつつ旧文化破壊の激しい行動を繰広げたが、やがて文化大革命は、街頭闘争から実権派打倒のための奪権闘争へと質的転換をとりあげていった。しかし、実権派の抵抗も根強く、各地で奪権と反奪権の武闘が相次いだとき、林彪麾下の人民解放軍は六七年一月二十三日、奪権闘争への全面的な介入を決定した。ここに奪権闘争の性格は急変し、以後中国は兵營体制への道を進んでいった。一方、一九六七年「一月革命」といわれる上海の奪権

闘争で、上海の造反派はコミュニケーション型権力を構想しはじめたが、党中央はそれを急速押えつけてしまった。これは文化大革命の一つの転換点であり、革命化への流れは、このときを転機として秩序化への流れに変わっていくのである。以後、毛・林主流派は、革命派の「大連合」、すなわち革命幹部、軍代表、革命的大衆代表からなる「三結合」による革命委員会の樹立を呼びかけ、これは六八年九月に全国の一級行政区のすべてに成立した。

こうしたなかで一九六九年四月、中国共産党九全大会（第九期全国代表大会）が、八全大会以来二年ぶりに開催された。この大会は、文化大革命が上からの党再建という大きな結節点に達したことを示すとともに、毛沢東の無類の権威を確立し、林彪を毛沢東の後継者（接班人）として擁立するためのセレモニーであった。党の再建は大会以後二年四ヶ月を要して七月八月にようやく全国の一級行政区に党委員会が再建されたが、その実質は、旧幹部を含む軍指導者と周恩来への項参照系統の行政官僚との結合という、九全大会以後の中国リーダーシップの妥協的性格を反映したものに变质していた。

【林彪異変】この間、毛沢東側近として文化大革命の推進をしない、文革小組組長であった陳伯達は、一九七〇年八月九月の中国共産党第九期二中全会で、「大野心家、陰謀家」とされ、失脚した。陳伯達失脚は、党内左派、文革イデオログの退潮を象徴的に示したのみならず、毛沢東の権威の後退をも示すものであった。こうした状況のなかで発生したのが七月九月の林彪異変である。林彪異変は今日なお多くの謎に閉ざされているが、七月二年七月中国当局は、林彪が毛沢東暗殺に失敗し、逃亡中モンゴルで墜落死したという驚くべき筋書を公表した。

文化大革命の結末【十年大会と林彪批判】文化大革命の一つの重大な結末が深刻な林彪異変となって露呈したのちの一九七三年八月、中国共産党十全大会が開かれ、周恩来は政治報告、王洪文の党規約改正報告を採択し、中央委員会主席には毛沢東、九全大会では林彪一人であった副主席には周恩来、王洪文、康生、葉劍英、李德生の五人を選出した。十全大会は、林彪処断と対し非難を全党あげて行なった壮烈な儀式の観を呈し、九全大会路線から林彪色を一掃し、同時に林彪の「罪」を利用して毛沢東批判を匂わせたことにも示されるように、「毛沢東体制下の非毛沢東化」と脱文革を志向する「潮流」の大きさを確認させた。一方十全大会と前後して生じた

孔子批判・始皇帝礼讃のキャンペーンは、やがて「批林批孔」運動となって「反潮流」の巻返しははかられ、毛沢東体制末期の内部角逐はますます熾烈化していった。

【杭州事件・天安門事件】一九七五年一月の第四期全国人民代表大会第一回会議は、懸案の新憲法を採択し、「農業・工業・国防・科学技術の現代化（四つの現代化）」という新しい国家目標を初めて公式に提示して、毛沢東以後の時代へ向けて中国が進むべき方向を示唆した。しかしこの大会直後から、江青ら文革派は、「潮流」への「左からの巻返し」をはかっていた。このようなとき七五年夏に生じた杭州事件は、工場労働者の賃上げ要求ストライキによる杭州一帯の混乱を軍によって制圧したという深刻な事件であり、「貧困のユートピア」を強制した毛沢東体制の末期的矛盾を露呈したものであった。

【潮流】と「反潮流」とが内部的に角逐するなかで、一九七六年一月八日、周恩来はついに病に倒れた。その葬儀で弔辞を読んだ鄧小平は、あえて「四つの現代化」路線の継承を文革派リーダーの前で誓ったため、「走資派」批判キャンペーンが二月初旬から一斉に展開されて、公衆の面前から再び姿を消した。同じ二月、文革派非上海グループの華國鋒が毛沢東から國務院総理代行に指名されて一躍クローズ・アップされたが、こうした「逆潮流（反潮流）」への大衆的抗議が、四月五日に起った驚天動地の天安門事件であった。党中央は、これを反革命事件として断罪し、鄧小平の全職務を解任したが、のちに評価が逆転し、「偉大な四・五運動」として称讃されるように、天安門事件こそ、毛沢東体制下における大衆叛乱のクライマックスであった。

【毛沢東の死と北京政変】一九七六年九月九日、ついに毛沢東は逝ったが、その死を悼むいとまもなく後継者をめぐる闘争が側近体制の内部で激化した。十月七日、「既定方針」とり事を運ぶ」との毛沢東遺訓を掲げて権力継承権をいちはやく主張した文革派上海グループ、つまり「四人組（王洪文、張春橋、江青、姚文元）」が一網打尽に逮捕されるといふ衝撃的な北京政変が起った。

北京政変は、「四人組」ら文革左派（上海グループ）と、華國鋒、汪東興ら文革右派（非上海グループ）との権力継承をめぐる宮廷革命的な色彩を帯びた予防クーデターであったが、積年の文革型政治に対する民衆の不満を背景に、ここに華國鋒体制が一挙に形成された。華國鋒は、後継者としての正統性を「あなたがやれば私は安心だ」とい

いう、もう一つの毛沢東遺訓によって誇示したが、それは、やがて非毛沢東化の進展とともに華國鋒の政治的将来を拘束することになった。

【非毛沢東化】「四人組」の罪状を激しく糾弾するキャンペーンが続けられ、翌一九七七年七月の中国共産党第一〇期三中全会で鄧小平は再復活をげた。文化大革命の終結が公式に宣言され、葉劍英、鄧小平、李先念、汪東興を党副主席に選任した同年八月の中国共産党十一全大会では、新しい党規約のなかに「四つの現代化」が明記された。この「四つの現代化」が統一的国家目標として最後の定着したのは、七八年十二月の中国共産党第一〇期三中全会においてであった。かくて中国は、毛沢東政治からの歴史的な転換をようやく実現し、今日の「四つの現代化」路線へと大きく旋回したのであった。

【大いなる虚妄】一九七九年十月一日、中国建國三〇周年祝賀集会で、葉劍英副主席が初めて文化大革命の誤りを指摘した。六〇年代後半からの一〇年間は、「文革の一〇年」として中国社会全体を混乱にも深刻な亀裂をもたらしたが、ついになんらの具体的成果も生み出すことはなかった。八一年六月の中国共産党第一二期六中全会による「建國以来の党の若干の歴史的問題に関する決議」では、文化大革命が党の決議として公式に否定された。今日、「文化大革命」は一場の悪夢として公式にかっこ付きで引用されるにいたっている。そして劉少奇をはじめ文化大革命で打倒された指導者がすべて復活・名誉回復する一方、文革派はことごとく失墜・凋落して非毛沢東化が進展した。一時期、人類史上の偉大な実験だと外部世界でしきりにたたえられた文化大革命は、大いなる幻影であり、虚妄でしかなかったばかりか、中国現代史上最大の悲劇だったのである。へし「中国」「中国史」

【毛沢東】  
Kenneth G. Lieberthal  
〔中嶋 嶺雄〕

文化変容

Acculturation 異なる文化をになう人々が互いに接触することによって、それぞれの人工的な製作物、慣習、信仰などに生ずる変化の過程である。この言葉はまた、たとえば若干の伝統的な行動様式を保持しつつアングロ・アメリカの様式を取入れているナバホ・インディアンを